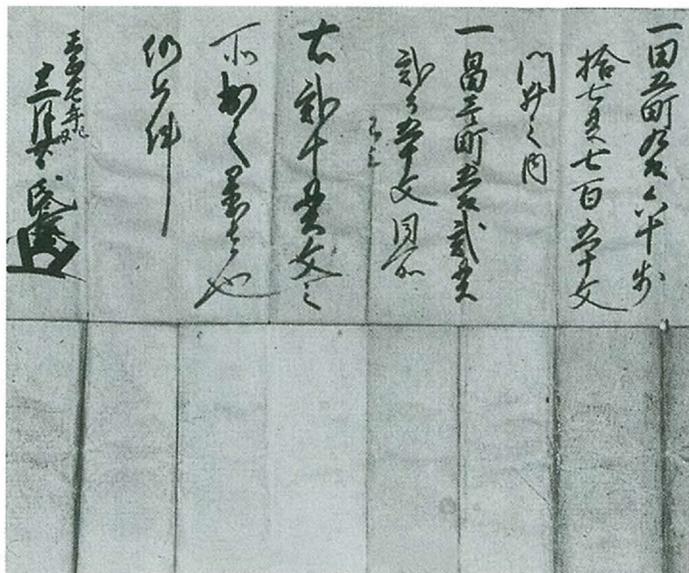


成田氏長

うじなが

第71話



成田氏長判物（市指定文化財）

氏長は、父長泰ながやすと不和になり、クーデターの父を城から追放し、永祿九年（一五六六）家督を相続し忍城主となりました。越後の上杉謙信や小田原城の後北条氏から味方するよう説得工作が頻繁に行われましたが、結局後北条氏に味方し、天正二年（一五七四）には謙信により忍城下を焼かれています。

天正一八年（一五九〇）豊臣秀吉の小田原城攻めに際し、氏長は小田原城に籠城し、忍城は小田原城降伏後も抵抗し籠城戦を続けましたが、周囲に味方なくやむなく開城。文明年間の初期から百年余り守り続けた城・領地の全てを失いました。

氏長は秀吉方の武將蒲生氏郷かみこうじょうに預けられ、氏郷に従い武功を上げ、やがて家康に召し出されて烏山城からすやま（栃木県烏山町）二万石余を与えられました。関東で最後まで秀吉に抵抗していた経緯からすれば、大名としてすばやい再生を遂げたことになり、極めて珍しいことといえます。以前から家康と親しく交流していたことが有利な条件となったともいわれています。

その後の氏長は、秀吉の文祿の朝鮮出兵により釜山城の普請を手伝った記録がありますが、烏山より京都に上洛し、さかんに連歌の会を催し、当代一流の文化人と交流し、連歌三昧の生活を送った後、文祿四年（一五九五）大往生を遂げています。

松平家忠

第72話



松平家忠画像

(愛知県幸田町・本光寺蔵)

水攻めで開城した忍城に、家康は、戦いで傷んだ城を修理するため、松平家忠を派遣します。

家忠が歴史上名を残したものが二つあります。慶長五年（一六〇〇）鳥居元忠らとともに伏見城を守り、石田三成らの西軍の攻撃により壮絶な戦死を遂げたことと、天正五年（一五七七）一〇月一七日から文禄三年（一五九四）九月頃までの長期間に渡る日記を残したことです。激しい戦いの中で一日わずか数行ですが、戦国時代末期の貴重な記録として注目されています。

この『家忠日記』には、天正一八年八月突然忍城に行けとの命令を家康から受けた時から、次の任地に移るまでの一年半余り、忍城の修理の様子や城下町・行田宿での出来事などの記事が書かれています。日記を通して知られる家忠は、華々しい戦闘ではなく築城や城の修理などの土木技術に優れた才能を持ち、能や連歌を愛した文人肌の人でした。同じ連歌を通しての交際であったのか元の忍城主成田氏長との音信が頻繁にあったことも日記から知ることができます。

家忠は、四百年前の八月に伏見城で壮絶な戦死を遂げます。その代償として子孫は、雲仙普賢岳の麓、鳥原で六万五千石余りの大名として明治を迎えることができました。自らの死が子孫の繁栄につながる典型的な例といえます。

松平忠吉

ただよし

第73話



松平忠吉画像

忠吉は、家康の四男で二代將軍秀忠と同じ母、西郷局から生まれた弟になります。(東条) 松平家を継ぎますが、小牧・長久手の戦いののち、大坂城に人質として送られました。天正二〇年(一五九二)に忍城主となりますが、まだ一三歳であり、実際の政務は家老の小笠原吉次がみていました。やがて元服し井伊直政の娘と結婚、慶長三年(一五九八)には男子が誕生しますが数日で亡くなってしまいます。この子は梅貞童子といいますが、墓及び御守筒(いずれも市指定文化財)が城西の正覚寺に残されています。

忠吉が歴史の舞台に登場するのは、関ヶ原の合戦です。石田三成らの西軍に対して、家康は福島正則らの先発隊を派遣します。この先手の総大将が忠吉で、山道を進む秀忠の徳川家譜代の部隊と美濃で合流する計画でしたが、秀忠の部隊は合戦に遅れてしまいます。合戦では西軍の島津隊と激戦になり自らも負傷しますが、武勇を天下に示すことになりました。合戦後、忠吉は大坂の抑えとして尾張の清洲城に移りますが、やがて病気がちとなり、慶長一二年(一六〇七)わずか二八才で亡くなります。この時四人の家臣が殉死します。これが話題となり以後江戸時代初期に殉死が流行するきっかけになりました。忠吉と殉死した四人の墓は、名古屋の性高院にあります。同寺には忍の正覚寺から招かれた源道上人の木像も残されています。

松平信綱のぶつな

第74話



平林寺の山門「凌霄閣」

慶長元年（一五九六）に大河内金兵衛久綱ひさつなの長男として生まれましたが、叔父松平正綱まさつなの養子となります。寛永四年（一六二七）一萬石の大名となり大河内松平家が成立します。

さらに忍城に代官として長く在番した父久綱の後に寛永十年（一六三三）忍城主となり三万石で入城します。

このとんとん拍子の出世の元は、慶長九年（一六〇四）に後に三代將軍になる徳川家光の小姓となったことから始まります。家光が將軍に就任すると一緒に小姓として仕えた阿部忠秋とともに出世を重ね幕府の要職についていきました。

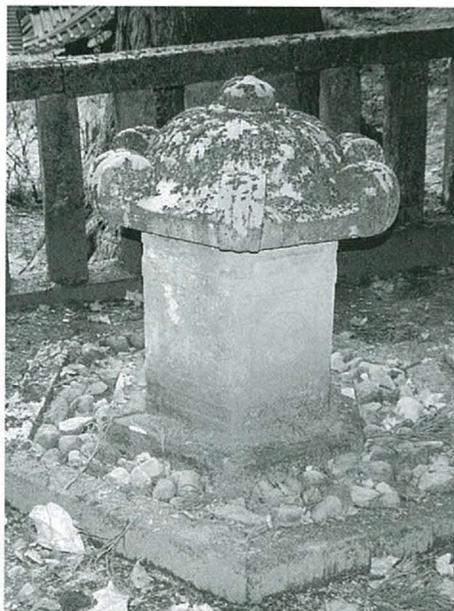
信綱が忍城主時代に起きた事件で最大のものが島原の乱の鎮圧です。寛永十四年（一六三七）のこの反乱は、九州の島原半島や天草島の農民とキリシタン信者とが結びつき起きた島原城主松倉氏に対する反乱でした。鎮圧に手間取り、幕府から直接鎮圧に赴いたのが信綱で、翌十五年の二月末頃に二カ月かかってようやく鎮圧しました。この島原の乱には、忍にいた信綱の多くの家臣が参加しています。信綱の墓がある新座市の平林寺にはこの乱で亡くなった敵味方両者を祀る供養塔もあります。

この大河内松平家は、愛知県の吉田藩で明治を迎えますが、大河内正敏氏の代の昭和初期に六十数社を傘下におく理研コンツェルンを築き上げます。

阿部忠秋

ただあき

第75話



日光の忠秋墓所

忠秋は、慶長七年（一六〇二）に生まれ、同一五年八歳の時、松平信綱とともに六歳の家光の小姓になり、家光が三代將軍になるとその政權運営のために尽力しました。

忠秋は、忍城主松平信綱が島原の乱鎮圧の功績により加増され川越城に移った後に壬生城（栃木県）から忍城に移りました。以来一八四年間の長きに渡り文政六年（一八二三）に白河に移るまで、阿部家は忍に留まり忍城の改築や城下町の整備を行い現在の行田の基礎をつくりました。

忠秋は老中などの幕府の要職にあること三三年間に及び、篤実、実直、温厚な人柄は、才知に富み知恵伊豆といれた信綱以上の人望を集めたと言われます。慶安三年（一六五〇）家光の子家綱の傳役となりましたが、翌四年家光が死去すると老中として引き続き家綱を補佐し、由井正雪の慶安事件や明暦の大火などに対処しました。

寛文六年病氣により老中を辞し延宝三年（一六七五）七四歳で亡くなります。生前の家光に対する忠節を評価され、分骨された墓が家光の墓所である日光大猷院廟受付から数十メートル直進した右側の杉林の中にあります。機会がありましたら忠秋の墓もぜひ訪れてください。

高久隆古

たかくりゆうこ

第76話



伊勢物語（左隻）白河市歴史民俗資料館蔵

隆古は、文化七年（一八一〇）に忍城主阿部家の家老である川勝隆任の三男として忍城下に生まれました。文政六年（一八二三）に忍の阿部家が白河に、白河の（久松）松平家が伊勢の桑名へ、桑名の（奥平）松平家が忍に転封になる三方領地替えがあり、この時隆古も白河に移住しました。

白河に移住後まもない一七か一八歳の頃、隆古は絵師を志し江戸に上り、最初は谷文晁の高弟依田竹谷に画法を学び、後に復古大和絵の田中訥言を慕って上京しましたが果たせず、その弟子の浮田一恵に有職故実や和歌を学びました。

江戸に戻ってからまもなく、谷文晁門下の四天王といわれ江戸時代後期を代表する文人画家である高久靄厓が没すると、天保一四年（一八四三）隆古は高久家の婿養子となって家を継ぎ高久姓を名乗り、中国風に高隆古と名乗るようになりますが、後に高久家を去ることになります。

隆古の画風は、「源氏物語」や「伊勢物語」などの古典に取材した復古大和絵の作品とともに、高久家の名跡を継いでからは谷文晁系の山水画や山水花鳥画なども描いています。

隆古は安政六年（一八五九）に没しますが、高久靄厓、渡辺華山、椿椿山らとともに、四大家と称される評価を受けています。

中野鍼的しんてき

第77話



額納奉松衡秀の院照遍

鍼的は、忍城主であつた阿部正由まさよしの家臣であり、盲人で鍼術に秀でていました。また、和歌にも通じ駒形遍照院の秀衡松の松風に心眼を得たので、この松をこよなく愛したといひます。この秀衡松は、奥州藤原秀衡とのかかわりを伝える松でしたが、享和三年（一八〇三）六月に雷火により焼失したのを惜しみ、一間余りの大きな額をつくり薬師堂に奉納し、往時の松の姿を今に伝えていきます。

鍼的は、近江八景にならつて忍八景を選び歌で現しました。

御作事帰帆（矢場皿尾門あたり）

棹さして作事に帰る舟はいま

うちでの沼も後の追風

山鳥暮雪

あしびきの山鳥行くに松なみの

川をへだてし雪の夕ぐれ

他に新組晴風、皿尾夕照、薬師晚鐘、小沼夜雨、天満秋月、菅根すげ田落雁等が選ばれており、当時の忍城城下町の風景が詠まれています。八景というと、昭和二九年に市制5周年を記念して選ばれた行田八景を覚えている方も多いいと思います。埼玉古墳群、水城公園、聖徳太子公園、長久寺久伊豆神社、忍城址、新忍川の夜桜、利根の水郷、新兵衛地蔵尊などでした。

さすがに鍼的が愛した風景は見られなくなりましたが、まだまだ緑豊かな行田には残したい風景があります。

松平忠明

ただあきら

第78話



松平忠明画像(天祥院・京都府)

長篠の戦いで長篠城に籠城した奥平信昌と徳川家康の長女亀姫との間の四男として天正十一年(一五八三)に三河国(愛知県)新城に生まれました。同一六年家康の養子となり松平姓を貰い、後に二代将軍となる秀忠の一字を賜り松平忠明と名乗り、上州(群馬県)小幡城を拝領しました。

豊臣家が滅亡した大坂の陣に参加し、特に夏の陣では豊臣方の有力武将将後藤又兵衛の軍と道明寺の戦いで激戦を交わし、忠明の家臣山田十郎兵衛が後藤又兵衛を一騎打ちの末倒したことが松平家に伝わった大坂御合戦絵巻に記録されています。

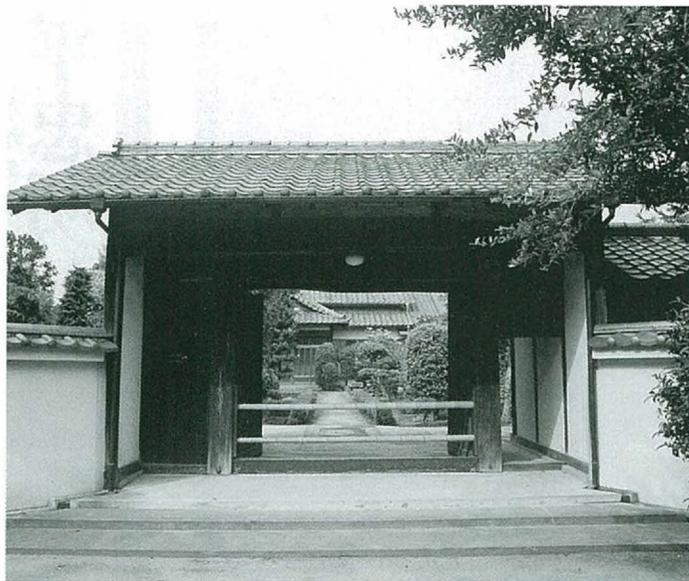
戦後忠明は、大坂に十萬石を与えられ、大坂の町の復興にあたり、町割りの再整備や道頓堀の完成など大坂繁栄の基礎を築きました。また、大坂時代の元和三年(一六一七)に東照宮を建立。大坂から大和郡山城に移ってから、兄家治の菩提を弔うために桃林寺を、奥平家始祖奥平貞俊のために龍源寺を、奥平家中興の祖であり忠明の祖父奥平貞能のために大藏寺を建立しました。これらの社寺は松平家の移封とともに移りましたが、最後の地である行田に現在あります。(龍源寺は廃寺)

家康の外孫である忠明ゆかりのこれら社寺と松平家の菩提寺である埼玉の天祥寺には、家康の画像をはじめ、単に行田の歴史だけでなく日本の歴史を知る上で必要な、貴重な文化財が今でも残されています。

松平忠堯

ただたか

第79話



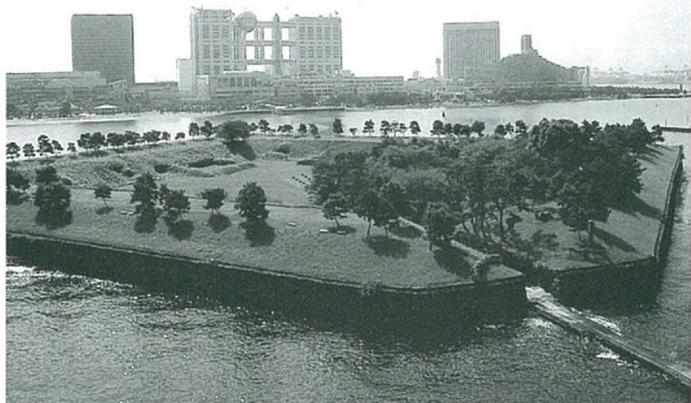
松平忠堯の墓所がある天祥寺（埼玉）

松平忠明ただあきの没後、その遺領一五万石は、長男忠弘ただひろが相続しますが、白川城（白河）の時代に起きたお家騒動（白川騒動）により、本来改易取りつぶしのところを、五万石を減らし、一〇万石に所領を減らされます。白川騒動の結果十歳の忠雅ただまさが家督を相続し、山形城、備後福山城を経て伊勢桑名城に移り、以後松平家は一一三年間桑名城で過ごし、文政六年（一八二三）に忍城に移ります。この時の松平家の当主が忠堯で、二年前に家督相続したばかりでした。忠堯は、桑名から東照宮と、菩提寺の天祥寺などを移転新築し、天保七年（一八三六）には桑名で藩校であった進脩館を忍で再興し、藩士の師弟の教育に当たらせるなど、家臣とその家族の移転を見事に遂行させました。

桑名から忍への引越しの様子は、家臣の黒沢翁満くろさわうんまんが残した記録の中に、引越しは家臣とその家族を含めると多人数となり幾組にも区分して、日を分けて出発し、黒沢家は一〇月一〇日に出発し二二日に忍に着いたこと。桑名では一〇七畳もある屋敷を賜っていたが、忍では三八畳の屋敷であり、全体をみても藩士に必要な数の半数にも足りない有様であったことが記録されています。それは松平家が、一〇万石に減封された時リストラにより家臣の数を減らすことをせず、現在の給料にあたる知行高を減らして凌いできたために、石高の割に家臣の数が多くことがその原因でした。

松平忠国

第80話



三番台場（現 お台場海浜公園）

桑名から忍に転封した松平家は、九代忠堯ただよから忠彦ただひこに、さらに天保一二年（一八四二）忠国が家督を相続します。忠国の生涯については、津本陽氏の小説「開国」に紹介されており、まだ皆さんの記憶に残っていることと思います。

忠国が家督相続した翌年、幕府より異国船警備のため房総半島の富津付近の警備を命じられます。さらに五年後には富津を会津藩と交替し半島の先端洲の崎と大房崎に転じます。江戸湾の対岸の警備は鎌倉までを川越藩、それ以南を彦根藩が受け持ち、江戸湾への異国船の侵入を防ぐことになりました。

嘉永六年（一八五三）米国のペリー提督による久里浜での「国書」奉呈後、米国旗艦隊は忍藩などの防衛戦を突破し、將軍の居城江戸城を艦砲射撃の射程内に置く羽田沖まで侵入しました。これに驚いた幕府は二重防禦戦の考えから海岸の砲台から二キロ先に台場を計画、早速品川沖に一から三番台場を建設し、忍藩は三番台場の守備を命じられます。しかしながら翌安政元年再び来航したペリー艦隊の圧倒的な軍事力の威圧のもとに幕府は米国との間に「和親条約」を横浜で調印します。ここに三代將軍家光以来二百余年続いた鎖国令は破棄されました。

こうした外国文化と忍藩の人々との接触は、明治になり西洋技術や学問の世界で活躍した行田出身の人々を生み出すこととなります。